

# 『大乘莊嚴經論』 「眞実品」 における advaya の一考察

早 島 慧

## 0. はじめに

『大乘莊嚴經論』 (*Mahāyānasūtrālaṅkāra[-bhāṣya]*: MSA[-Bh]) 第 VI 章「眞実品」 k. 1 は、勝義の特徴について説き、その特徴を 5 種の advaya であると説く。advaya とは「有と無」等といった対立する概念双方を否定するものであるが、本稿は清弁の円成実性批判を参照したうえで、k. 1 における advaya について考察する。k. 1 は諸研究によっても考察されてきたが、清弁の用いる二種否定の観点から k. 1 を改めて考察した場合、MSA もその二種の否定概念を区別して用いており、その区別が瑜伽行派独自の思想と関連することが明らかとなる<sup>1)</sup>。

## 1. 清弁の用いる二種否定と世親

PPr-XXV において、清弁は瑜伽行派の円成実性を批判するに際して、MAV-I に説かれる dvaya-abhāva を問題とし、純粹否定 (\*prasajya-pratiṣedha) と定立的否定 (\*paryudāsa) との区別を以て批判する<sup>2)</sup>。PPrT を参照すれば、純粹否定とは、「バラモン」を否定した場合にバラモンを否定するのみであって、「クシャトリヤ」を定立しない否定であり、定立的否定とは、「バラモン」を否定し「クシャトリヤ」等を定立する否定である<sup>3)</sup>。清弁は、dvaya-abhāva が純粹否定によるものであれば、二無の有を定立せず、定立的否定によるものであれば、瑜伽行派の主張する二無の有を定立するが、定立的否定を用いることは不合理であると批判する<sup>4)</sup>。この清弁の瑜伽行派批判は、中観派と瑜伽行派との思想的相違に関して、清弁が二種否定の区別を意識していたことを意味する。

江島 [1980] は、「空性論証に二種否定の考えを導入したのは、現存する MK 中心の文献によるかぎり、やはり Bhāvaviveka が最初である」と指摘する<sup>5)</sup>。しかし、世親造『縁起経釈』 (*Pratītyasamutpādavyākhyā*: PSVy) において、否定詞「a」に

ついて七種の否定の区別が確認され、「存在の否定」、「別であること」という観点から、否定詞「a」の解釈に純粹否定・定立的否定の区別がなされていることが、楠本 [2007] によって指摘されている<sup>6)</sup>。PSVy は二種否定の用語を直接用いないが、MSABh の著者世親が、清弁以前に否定概念の区別を意識していたことが伺える。

つまり、江島 [1980] によって『中論頌』を中心とした文献群において、空性論証に二種否定の考えを導入したのは清弁であると指摘されてきたが、世親は清弁以前に二種否定の区別を意識しており、この点をふまえ MSA-VI k. 1 を考察すると、世親がその区別をもって勝義の特徴である advaya を解釈していることが分かる。

## 2. 『大乘莊嚴經論』「眞実品」第 1 偈における advaya

MSA-VI k. 1 は次の様に、勝義の特徴が 5 種の advaya であることを示す<sup>7)</sup>。

[1] na san na cāsan [2] na tathā na cānyathā [3] na jāyate vyeti na [4] cāvahīyate /  
na vardhate [5] nāpi viśudhyate punar viśudhyate tat paramārthalakṣaṇam // k. 1

[1] 有でもなく、無でもない。[2] 同一でもなく、別異でもない。[3] 生じるでもなく、滅するでもない。[4] 減るでもなく、増えるでもない。[5] また、清浄になるのでもなく、清浄になるのでもある。以上が勝義の特徴である。

この k. 1 における 5 種の advaya に用いられる否定概念を、MSA 及び注釈書の Tib 訳者は次の様に翻訳している。

		MSAK	MSABh	MSAṬ	SAVBh
1	有	yod min	yod pa ma yin pa	yod pa ma yin no	yod min
	無	med min	med pa ma yin pa		med min
2	同	de bzhin min	de bzhin ma yin pa	de bzhin ma yin pa	de bzhin ma yin
	異	gzhan min	gzhan ma yin pa	gzhan ma yin pa	gzhan ma yin
3	生	skye [med]	skye ba med pa		mi skye
	滅	'jig med	'jig pa med pa		mi 'jig pa
4	減	'bri bar mi 'gyur te	'bri bar mi 'gyur pa	nyams pa med pa	'bri bar mi 'gyur pa
	増	'phel ba med	'phel bar mi 'gyur pa	'phel ba med pa	'phel ba med
5	浄	rnam par dag pa med	rnam par dag par 'gyur ba med pa		rnam par dag pa med pa
	不浄	rnam par dag 'gyur	rnam par ma dag pa ma yin pa		rnam par dag 'gyur ba

MSA の Tib 訳者は、MSA-VI k. 1 における否定概念について、“ma yin pa”, “min pa”, “med pa” 等の複数の表現を用いて各 advaya を翻訳している。通常 Tib 訳で

## (116) 『大乘莊嚴經論』「真実品」における advaya の一考察 (早 島)

は、純粹否定 (prasajya-pratiṣedha, med par dgag pa) は “med pa” 等、定立的否定 (paryudāsa, ma yin par dgag pa) は “ma yin pa” 等と訳される。複数の表現を以て advaya の否定概念が翻訳されている点は、MSA 及びその注釈文献の翻訳者が、五種の advaya を全て同じ否定概念とは理解せず、五種の advaya に否定概念の区別があると理解していたことを示唆している。

MSA-VI の 5 種の advaya のうち、三性説に関する [1]・[2] では定立的否定が、法界が無為であることを説く [3] では純粹否定が用いられることが<sup>8)</sup>、Tib 訳者の理解、及び教学的な文脈上の理解から判断されるが<sup>8)</sup>、MSA において、この二種否定の区別が意識されたことが分かる明確な例が、[5] である<sup>9)</sup>。

[5] **na viśudhyati prakṛtyasaṃkṣiptatvān na ca na viśudhyaty āgantukopakleśavigamāt /**  
〔法界は〕本来汚染されていないので、清浄になるのではない。そして、外来的煩惱から離れるので、清浄にならないことはない。

この [5] に関して、MSAK-VI では「清浄にならない」(na viśudhyate) と「清浄になる」(viśudhyate) と説かれており、advaya の形式をとっていない。ただし、MSABh-VI は「清浄になる」(viśudhyate) を「清浄にならないことはない」(na na viśudhyati) と、advaya の形式で注釈しており、これは韻律の問題に起因すると考えられる。MSABh が「清浄となる」を「清浄にならないことはない」と注釈していることから、「清浄にならない」の否定が「清浄となる」を定立する、つまり、定立的否定が用いられていることは明白である。

さらに、法界が [5] である理由について、MSABh-VI は「本来汚染されていないので、清浄になるのではなく、外来的煩惱から離れるので、清浄にならないことはない」と注釈している。勝義・法界は本来的に清浄であるので、「清浄になる」を否定しても、「清浄にならない」を定立することはなく、純粹否定が用いられたものと理解される。一方、「清浄にならない」を否定した場合、それが本来的に清浄であったとしても、外来的煩惱による汚染があるので「清浄になる」を定立するのである。つまり、[5] は、純粹否定と定立的否定の両者が用いられているものと理解される。さらに、Tib 訳に注目すると、「清浄になる」に対する否定は、すべて “med pa” が、「清浄にならない」については、唯一否定の形式となっている MSABh において “ma yin pa” が用いられている。Tib 訳者もまた純粹否定と定立的否定の両者が用いられる advaya と解釈しているのである。

さらに、この [5] は清浄法界、自性清浄・無垢清浄に関して説かれたものと考えられる。つまり、本来的に清浄なるものは、染汚法、清浄法が増減しようが、

それ自体が増減することはない(自性清浄)。そして、それは本来的に清浄なものであるので、「清浄になる」ということはないが、外来的な煩惱を取り除くという意味では、「清浄になる(清浄にならないことはない)」のである(無垢清浄)。

また、[3]・[4]・[5]と同様の列挙は、『二万五千頌般若経』(*Pañcaviṃśatisāhasrikāprajñā-pāramitāsūtra*: PsP)において、空の特徴として「不生不滅・不染不浄・不増不減」という形式で確認される<sup>10)</sup>。Skt 原文が MSA-VI k. 1 とは一致しないことから、MSA が直接この PsP を意識したかは不明瞭であるが、この組み合わせが MSA 独自のものではなかったと推測される。このうち、「不染不浄・不増不減」については、MSA-VI における列挙とは順序が入れ替わっており、[5]「清浄になるのでもなく、清浄になるのでもある／ならないのでもない」は、PsP では「不染不浄」となっている。「不染不浄」は本来的に不染不浄を超えた自性清浄という法界のあり方を示すが、「清浄になるのでもある／ならないのでもない」という表現では、「無垢清浄」という瑜伽行派の清浄法界の特徴が示されるのである。この点は、MSABh が二種否定の相違を意識した上で、純粹否定ではなく定立的否定を用いることによって無垢清浄を示したものと理解される。

### 3. おわりに

以上のように、MSABh-VI k. 1 は、清弁が用いるところの「純粹否定」、「定立的否定」という二種否定を区別した上で、勝義の特徴を示している。そして、三性説に基づいて説かれる [1]・[2]、無垢清浄を示す [5] では定立的否定が、無為を示す [3] および自性清浄を示す [5] では純粹否定が用いられる。前者は三性説、無垢清浄という瑜伽行派の特徴的な思想を、後者は他の仏教徒と共通した思想を示すものである。これは、清弁以前に瑜伽行派が二種の否定の区別を意識しており、その区別を用いて自派独自の思想を示したものと理解される。

従来、瑜伽行派の独自思想の起源を考える場合に、この二種否定の区別は意識されることがなかったと思われるが、MSABh は自派独自の思想を示すにあたり二種否定を意識的に使い分けている。そもそも『菩薩地』「真実義品」における空性理解、或いは MAV における空性の特徴等といった瑜伽行派の特徴的な思想は、純粹否定ではなく定立的否定によってこそ成立する。清弁の円成実性批判を考慮しても、瑜伽行派が独自思想を発展させるにあたって、定立的否定が果たした役割は考慮されるべきではなかろうか。

## (118) 『大乘莊嚴經論』「真實品」における advaya の一考察 (早 島)

- 1) 拙稿 2014 において, MSA-VI 全体の構造との関連に注目し k.1 を取り上げた. これに対して, 本稿では, 瑜伽行派の独自思想, 中観派との関連という観点から k.1 を考察する. k.1 の思想的背景, 及び復註の内容については拙稿を参照されたい.
- 2) PPr-XXV, D 247a5-b1, P 310a4-b1. なお拙稿 2014 では, dvaya-abhāva と還梵すべき Tib 訳を advaya と還元した上で考察を行っていた. ここにお詫びして, 訂正させていただきたい.
- 3) PPrT-XXV, D 299b3-5, P 355a7-b2. 同様の解説は TJ-III にもみられる.
- 4) Cf. PPrT-XXV, D 299b5-7, P 355b2-5.
- 5) 江島 1980, 117-118.
- 6) PSVy, D 7b2-8a1, P 8a3-b3. 楠本 2007, 212-214.
- 7) MSABh-VI, p. 22.
- 8) 紙面の都合上, [1]-[4] の検討については拙稿 2014, 36-51 を参照されたい.
- 9) MSABh-VI, p. 22.
- 10) PsP-I, T5: 22b6-7. Kimura ed., p. 64. *sūnyatā Śāriputra notpadyate na nirudhyate, na saṃkliśyate na vyavadāyate, na hīyate na vardhate, nātītā nānāgatā na pratyutpannā.*

## 〈略号〉

**MAVBh:** *Madhyāntavibhāga-bhāṣya. Madhyāntavibhāgabhāṣya.* Ed. Gadjin M. Nagao. Tokyo: Suzuki Research Foundation, 1964. **MSAK:** *Mahāyānasūtrālamkāra-kārikā.* **MSABh:** *Mahāyānasūtrālamkāra-bhāṣya. Mahāyāna-sūtrālamkāra: Exposé de la Doctrine du Grand Véhicule.* Tome I, *Texte.* Ed. Sylvain Lévi. Paris, 1907. Repr., Kyoto: Rinsen Book, 1983. **MSAT:** *Mahāyānasūtrālamkāra-ṭikā.* **PPr:** *Prajñāpradīpa,* D 3853, P 5253. **PPrT:** *Prajñāpradīpa-ṭikā,* D 3859, P 5259. **PsP:** *Pañcaviṃśatisāhasrikā Prajñāpāramitā. Pañcaviṃśatisāhasrikā Prajñāpāramitā I-2.* Ed. Takayasu Kimura. Tokyo: Sankibo Busshorin, 2009. **PSVy:** *Pratītyasamutpādavyākhyā.* D 3995, P 5496. **SAVBh:** *Sūtrālamkāra-vṛttibhāṣya,* D 4034, P 5531. **TJ:** *Tarkajvālā.* D 3856, P 5256.

## 〈参考文献〉

江島恵教 1980 『中観思想の展開——Bhāvaviveka 研究——』春秋社。  
 楠本信道 2007 『『俱舍論』における世親の縁起観』平楽寺書店。  
 早島慧 2014 『中観・瑜伽行両派における二諦説解釈の研究』博士論文 (龍谷大学)。

〈キーワード〉 『大乘莊嚴經論』, 勝義, advaya, 無二, 不二, prasajya-pratiṣedha, paryudāsa  
 (龍谷大学非常勤講師)